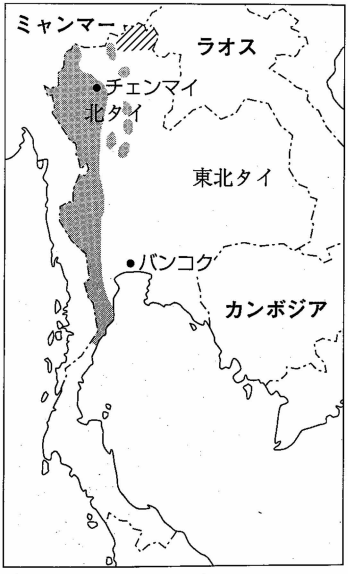
第2章
他者化するまなざしの交錯の中で
——タイ

速水洋子

1　はじめに

タイのジェンダーを考えるとき，そこに向けられた日本を含む先進国のまなざしが，セクシュアリティを強調したオリエンタリズムの色濃いものであることを意識せざるをえない。そこにはタイの女性といえば性産業，男性といえば性の享楽者に結びつくような，過度にセクシュアライズされたタイのイメージがある。そして，タイをめぐる様々な外国メディアの表象の中で性産業が占める割合は均衡を欠いている。ディシプリンを問わず，経済活動，宗教理念，親族組織，法体系，国家政策，いずれを論じる上でも売春は避けて通れないトピックになっている。外からタイの特に女性に向けられるまなざしと，タイ国内から自らを再規定しようとする営みは，性産業やセクシュアリティを軸に相互に影響しあいながら展開してきた。

その一方で，よく言われる東南アジアの女性の自立性の高さの一例としてタイの女性達があげられてきたことも事実である。実際，国際的な相互比較においてしばしば「女性の地位」の指標に用いられる労働参加，教育機会と識字率，雇用，参政権などについて，タイは他の東南アジア諸国と比較してもトップクラスに入る。特に労働参加に関しては，タイの女性は東南アジアの中でも，また日本に比べても常にはるか上の数値を示している。参政権も，東南アジアで最も早く，1932年の立憲革命後に得られた。就学率もどのレベルでも男女差は見られないばかりか，大学では女性が上回っている。しかし，労働参加について詳しく見ると，女性の多くは，低賃金の工場労働，販



タイ
影の部分はタイ国内のカレンの分布，
斜線の部分はタイ国内のアカの分布。

売やサービス業，そして統計に上らないインフォーマル・セクターに従事しており，ある収入額を境に，男女比が逆転する。高額収入取得者は，どの職種においても男性が女性をはるかに上回るのである。

議員数では女性国会議員は5％前後，地方ではそれ以下である。官吏は，1970年代以来，女性が半数以上を占めて増え続けてきたが，等級が最下位の1から3までは女性が過半数を占めるのに，等級が上がるほど比率は下がり，9から11の最上級では1割に満たない。こうした構造は私企業でも同様である。単純に女性の地位を測る普遍的な指標などはないこと，特定社会に一元的なジェンダーの理解など不可能であることをタイの例は教えてくれる。

本章は，タイ社会におけるジェンダー・セクシュアリティの形成と変遷の研究について概観する。特に，その過程に深く関わるタイ社会内外のまなざしの交錯を一つの切り口として，HIV／AIDS危機の始まる1990年代を境に，その前後でタイのジェンダー研究がどのように展開してきたかをまず概観する。その上で，「売春」というトピックを介して，グローバル化する舞台をめぐって，どのような内外のまなざしの交錯が見られ，その中で階級とジェンダーがどのように切り結ぶかを考える。筆者が主に調査・研究をしてきたのは山地に居住する少数民族である。先進国がタイに向ける他者化のまなざしの中でセクシュアリティが強調されるなら，タイ国内で周縁にある少数民族に向けられたまなざしにもまた同様の構図の繰り返しが見られる。タイのジェンダーを論じる上で，階級，セクシュアリティや民族をも含めた周縁への視点も無視できないこと，そして逆に民族や階級を論じる上でジェン

ダーの視点が不可欠であることを指摘したい。最後に，タイの事例がジェンダー・セクシュアリティ研究に再検討を促すものがあるとしたら何かを考えたい。

2　近代以降のタイにおける女性と女性学

本節では，近代以降の女性の社会的地位や運動の変遷を，タイ人自身による女性学の展開とともに，後の議論の背景として売春をめぐる社会状況の変転を踏まえながら紹介する。

近隣諸国において植民地下でナショナリズムが勃興した状況とは異なり，タイの近代化は，19 世紀末から 20 世紀半ばまでは，王宮とエリートの主導の下で近代国家へ歩む過程であった。その中で 20 世紀初頭，ラーマ 5 世王の奴隷制廃止を契機に売春女性の数は増加し(1)，都市の売春業は繁栄し，経営者は農村の貧困地帯から女性を連れ出すようになった。当時から売春に関する法は，徴税や性病の防止に関わるものであり，ゆえにむしろ売春を合法化するものだった。1928 年には国際連盟の圧力もあり，強制売春と児童売春を規制する法律が出されたが，実効力は全くなかった。そして 20 世紀半ば，インドシナ戦争にともない米軍基地が建設されると，タイの性産業は，形，規模ともに変質する。1960 年に初めて，売春を違法とする売春抑止法が発令されるが，むしろ違法化することによって女性達を違法行為に追いやり，さらにその立場を弱くすることになった。

タイ社会のエリート層の経験した近代化に目を転ずれば，1920 年代前後，一夫多妻制を否定し単婚を法制化する議論が，エリート層の間で大きな論議を呼んだ。これは，ルースが詳細に論じている通り，女性の権利擁護を主眼とするというより，この時期の国内外の政治的な状況を背景に，文明国タイに相応しい婚姻や女性のあり方が議論されたのであり，そのかげで妻たる良き女性と，性に携わる悪しき女性の二分が明確化した [Loos 2006]。また，国家のために献身的に国民を育てる母としての女性像が強調された。チュラーロンコーン大学では 1927 年から女性も入学するようになり，1935 年には単婚が法制化された。中流階層が生じつつあった当時の都市の大衆文化にも

ジェンダー意識の変化が見られたことをバルメが分析している［Barmé 2002］。立憲国家としての歩みを始めた1932年以後のナショナリズムの時代には女性組織も見られたが，これらはエリート女性による体制擁護的なもので，専門職の夫を持つ妻達がエリートとして下層女性に施しをするという博愛主義的なものに限られた［Darunee & Pandey 1991］。男性のエリート官僚と軍人を頂点とするナショナリズムの体制は，良き妻たる規範の下にあるエリート女性から，売春女性も含めた下層女性に至るまで様々な女性達によって支えられていたのだが，一方で，体制の言説においては，良き母・良き妻たる女性と悪しき女性の二分化が進行し，売春に関わる女性の数も増加した［Sukanya 1988］。

より先進的な女性運動が活発化し，女性が関わる社会問題に目が向けられるようになったのは1970年代以降である。1973年の学生革命時の民主化運動と1976年からの「国連女性の10年」が連動し，開発に関わる女性の問題，特に女性労働者や売春への関心が高まっていた。都市の繊維産業で働く女性労働者が参加した最初の大きな争議は1974年前後に起きた［重冨 1997］。1970年代後半は，軍の強権政治が復活した揺り戻し期で，女性組織も官立のものが中心であった。しかし1980年代以降，反共政策も懐柔的なものに変わっていく中で，NGOや草の根の活動が盛んになっていった。また，政府機関や民間においても，「開発と女性」を主な研究と実践の課題とする団体やプロジェクトが創始された。女性運動や女性をめぐる諸問題への意識も向上し，政府の5カ年計画には女性開発計画が含まれるようになり，全国の主要な大学に女性学関連のプログラムやセンターが設立された［江藤 1996a］。しかし，こうした活動の多くは女性問題や女性研究の重要性を訴える機会になる一方，官主体で女性のイニシャチブを取り込んでいった面もいなめない。

一連の運動に関わってきたのは中流女性達であり，彼女達の関心は，農村女性に向けられた。市場経済の浸透にともない，農村女性が安価な労働力として都市に移動し，中には売春に携わる例も少なくないことが彼女らの問題意識の対象になったのである。それまでのエリートによる良き妻たる女性の役割の強調を批判し，行政の物質主義的な開発政策や，近代化とともに父権化する社会経済システム全体に批判の目を向けていく。

こうした状況の中，タイ人による学問研究は，1990年代まで，政策に直接関連する問題が圧倒的に優先された。国家の経済的・社会的優先事項に関わる実証的かつ実践的な研究に強調点がおかれ，時間をかけた質的な調査を行う余地はあまりなかった。研究課題としては，労働や売春，農村女性と社会変化や都市への労働移動の問題が取り上げられた。また，家族計画，出産・育児，健康などの保健衛生的な関心は常に重要なテーマであり続けてきた。

3　タイ社会におけるジェンダー
——社会組織・仏教イデオロギー・開発

ここでは主に1980年代までの人類学を中心とするタイのジェンダー研究の動向のうち，次節で扱う売春とセクシュアリティに関する以外のものについて概観する。

農村の社会組織と仏教イデオロギー

1960年代から1970年代にかけて行われた農村の共同体研究では，伝統的なタイの農村社会において男女の役割が相互補完的で，女性の自立性が高いことが指摘された［Hanks & Hanks 1963］。女性は農作業に従事し，機会があれば小商いを行い，経済的に自立している。双系的に親族が組織される社会にあって，均分相続でありながら老親と同居する末娘への不動産などの相続の傾斜が見られ，結婚における婿側からの婚資の支払い慣行と，結婚後の妻方居住，そして祖先儀礼などにおける母系ラインの強調が女性の社会的・経済的地位の根拠としてあげられる。そして，女性親族が共同体の社会的ネットワークの核にあること，女性が親族組織の中で構造的に紐帯の役割を果たしていることが論じられてきた［Hanks 1963; Potter 1977; 水野 1981］。北部タイの儀礼組織における女性の中心性や女性の霊媒の研究もそうした女性の位置づけを異なる地域的文脈で論じている［Davis 1973; Cohen & Wijeyewardene 1984］。同時に，このような居住や相続，そして親族関係における母系のラインの重要性はあっても，公的権威はあくまでも男性に託されているこ

と，女性も相続の権利を有するが，家や家産の継承は，母から娘へではなく父から娘の夫へとわたることなどが指摘された。その中で，特に女性の母役割とそれにまつわる儀礼的慣行，あるいは娘が親に負う義務などが強調されてきた。これは次節で紹介する，売春を農村の因習によって説明する傾向につながる論点である。

女性が経済的に自立している反面，政治や官職への進出に顕著な男女差が見られることは本章の冒頭に紹介した通りである。1980年代までのタイのジェンダー研究において人類学の成果は多くない中で，目を引くのは，一見して社会的にも経済的にも自立している女性達が，官職と仏教においては劣位にあり，かつ，売春が盛んであるのは何故か，というジェンダー・イデオロギーの「謎」を解く試みである。それは女性の社会進出における偏りを仏教イデオロギーから説明しようとする試みでもあった。1980年代当時の人類学の象徴論やテキスト解釈論への傾倒が，タイのジェンダー研究にも一つの論点を見出したといえるかもしれない。カーシュは，タイ女性の経済活動の活発さは，仏教において出家という功徳の最上手段から排除される女性の劣位と不可分であるとする［Kirsch 1975］。一方，カイズは，仏教の民間伝承のテキスト解釈を試みて，女性は出家はできなくとも母として子を育て出家させることで功徳を得て，同等の社会的地位を築くのだとする［Keyes 1984］。

こうした議論は，テキスト解釈や教義主体の仏教理解に基づく宗教決定主義的な傾向が強く，現実の生活や仏教実践の中でのジェンダー関係の多義性に十分目を向けているわけではない。また，経済セクターにおける女性の可視性と売春への関与の二側面に限定的に目を向けて，テキスト解釈上の理解とこれを一元的に関連づけている。以上のように，社会組織の研究も仏教イデオロギーの研究も，従来漠然と論じられてきたタイ女性の自立性を，それぞれ別の角度から，問い直すものであった。

上述の議論と同じ頃に編まれたP.ヴァン・エステリクの『東南アジアにおける女性達』［Van Esterik, P. ed. 1996(1982)］所収の大陸部に関わる論文はいずれも仏教に触れており，出家できなくても仏教実践によってある程度の地位を獲得することができる女性瞑想家［Van Esterik, J. 1996(1982)］や，女性達が日常的に積徳行を担い，様々な形で宗教役割をこなすことを論じてい

る［Van Esterik, P. 1996(1982)］。いずれも短い論文ではあるが大所高所からのテキスト解釈ではなく，生活の中の仏教実践に女性の自立を見出そうとする方向性が見られた。

その後，仏教イデオロギーとジェンダーを結ぶ平板な議論に対しては，社会生活の現場に密着した視点から，異議が唱えられた。田辺は，北部タイの母系的に構成される集団による儀礼の分析において，テキスト解釈的な研究を批判し，儀礼に見出せるジェンダーの多義性を分析している［Tanabe 1991］。

1980年代後半以降は，山地を含む周縁の少数民族のジェンダーを論じた著書や論文なども出された［Eberhardt ed. 1988; Hutheesing 1990; 速水 1995, 1998］。この時期の人類学におけるジェンダー研究の動向に呼応して宗教や儀礼を中心とする文化的なイデオロギーとジェンダーの関わりが論じられ，日常の諸活動の中で，ジェンダー体系が価値体系の一環として形成されることが分析されている。

ジェンダー研究の転換と社会変化・開発への視点

タイ研究におけるジェンダー研究の転換点は1990年代半ば頃から見られる。ジェンダー・セクシュアリティ研究をめぐってタイの内外の研究者の歩調が近づいたのもこの頃からといえるだろう。1994年ロンドンで開催された国際タイ学会の基調講演にて，歴史学者レノルズはジェンダー研究の重要性を提言した。レノルズは，それまでのタイの特に歴史研究におけるジェンダーへの視点の欠如を指摘し，このような欠如の原因の解明を試みながら(2)単にタイの歴史を女性の観点から見直すのではなく，タイ史やタイ研究の支配的な言説に対抗する見方を生み出すようなジェンダー研究の勧めを説いた［Reynolds 1994］。

次に開催された国際タイ学会（1997年，チェンマイ）では，上記提言に呼応するようにジェンダー・セクシュアリティ関連のパネルが急増する。その内容は二極に分かれており，これは，その後の研究の傾向をよく表している。一つは国家開発の中の女性という，ジェンダーの中でも主に女性の問題に焦点をおいた女性学的な関心を中心とする，主にタイ女性研究者と彼女達と親

交の深い先進国のフェミニスト研究者による方向性である。今一つはHIV感染の社会問題化に触発されたジェンダー・セクシュアリティの研究を進めながら，より広義には従来のタイ理解を問い直そうという欧米の社会科学者を中心とする方向性である。後者については次節にまわすとして，まずここでは前者について概略を見ておこう。

女性学的な関心の動向については，この学会のパネルをもとに出版された『タイ社会における女性，ジェンダー関係と開発』[Virada & Theobald eds. 1997] で取り上げられているトピックを見ればよくわかる。開発や経済発展が女性にもたらす負の側面が，開発における父権主義，女性労働の搾取，女性の二重役割，女性の商品化と出稼ぎ労働などを通して強調される。また，仏教と女性については，上述の宗教決定論的な議論に代わって，仏教説話の解釈や女性による仏教運動の紹介を通して，女性にとって仏教が持つポジティヴな可能性を指摘する。その他，性規範や文学などにおける女性の表象，リプロダクティヴ・ヘルスとHIV／AIDS，タイ政治における女性の不在または不可視性と実際の影響力のあり方，などが議論されるが，本書のタイトルにはジェンダーとあるにもかかわらず，扱われているのは基本的に女性の問題である。

この本の序論で，タイのフェミニズム的関心からの女性研究の指導的立場にある人類学者アマラーは，東南アジアの伝統社会における双系的な親族組織と母系的傾斜がジェンダーにおける流動性や社会組織の多面性，そして女性の自立性と相対的な地位の高さの基盤にあったとした上で，そこへヒンドゥー，仏教，イスラーム，儒教などの外来伝統がもたらされることで，父権的な実践形態が持ち込まれた，と主張している(3) [Amara 1997: 4-5]。また，これと関連して，別書でフディージング [Hutheesing 1995] は，タイ周縁少数民族の女性が開発のもと，伝統社会で保っていた自立性を失い，伝統文化の衰退が抑圧の状況を生んでいるという主張を行っており，いずれも開発にともなう父権的支配の強化がテーマとなっている。タイ研究が，そして人類学全般の研究が，閉じた共同体における閉鎖系としてのジェンダー体系の描写から，社会的・経済的変化や近代国家の開発の歩みに取り込まれる農村や周縁を描く方向へと移行するのにともない，先述した農村社会や周縁の女性

達について論じられてきた相対的な自立性は，もはや失われた過去の伝統とされていったのである。

1960年代以来，農村部から都市部の繊維産業などへの労働人口の移動，その後は，経済発展にともなって，農村女性の近郊都市での労働が顕著になった。こうした農村経済の変化が，上述の「伝統的な女性の自立性」，あるいは農村女性の社会的・経済的役割にどのように影響するかを論じる研究もなされた。北タイ都市の女性に関するムエケの研究は，女性の生活における価値規範が市場経済化とともに変化していることを検証する［Muecke 1984］。また，東北タイ農村で労働機会が増加するとともに，女性には，家族における責任と生産労働との二重役割の負荷がかかることを指摘する江藤の研究［1996b］がある。また，女性の移動労働を，バンコクと東北タイの農村を結ぶフィールド調査によって検証したのが，ミルズである。ミルズは，女性達がバンコクへ働きに出かける背景には，農村の世帯における役割や期待とともに，「タン・サマイ（近代的）」な商業主義がもたらす都会的な文化を志向する若い女性達の欲望があることを指摘する。そして，彼女達は，タン・サマイな女性であることと，村の規範に従うことの間で自己のアイデンティティを模索することを論じている［Mills 1999］。一方，既婚の女性達も含めて，北部タイ都市近郊の新興工業団地で働く女性達や，工場における労働者達の相互関係に焦点を当てた平井は，女性労働者の消費行動に着目した［平井 1995］。また，「タン・サマイ」言説をより忠実にローカルな文脈にそって追究し，それが家族と工場における異なる権力関係の場で，抵抗と順応の方途となっていると論じている［平井 2001］。こうした視点は，上述のような開発と父権主義のもとで搾取される農村女性の像とは異なり，資本主義化の過程に女性が主体として関わる様態をとらえたものである。

以上は，1990年代までのタイ社会のジェンダー研究である。省みれば，丹念な現地調査とジェンダーの視点に基づく人類学的研究は，欧米でジェンダーの民族誌の隆盛期ともいえる1980年代から1990年代前半においてすら決して多くはなかった。

4　売春・HIV／AIDS・セクシュアリティ

1970年代，ちょうど中流女性の社会意識が何らかの市民運動に結びつくようになった時代に，インドシナ戦争下で，タイに米軍基地が置かれ，都市部の性産業が新たな展開を迎えた。さらに，1980年代に入り冷戦が終わると，タイは観光産業に外貨獲得の期待をかけるようになる。日本などの外国企業が盛んに現地法人を置くようになり，これもまた性産業への注目をさらに強めたともいえる。本章の冒頭で述べたように，タイに向けられるまなざしの中で，売春がことさらにクローズアップされることが，他者としてのタイ女性を色づけしてしまっていることは，当のタイの女性達にとっては，放置できるものではない。特に教育を受けたタイ新中間層女性は，自らのジェンダー・アイデンティティ構築の上でも，売春を無視することができない［Cook 1998］。こうした中で経済学者パスックのバンコクの売春女性を農村と結ぶ先駆的な経済的・社会的分析は，問題を実証的にとらえるスタンスと，売春女性自身へのインタビューという方法論とともに画期的であった［Pasuk 1982＝1990］。それまで，タイでは売春を，喜んで性的サービスに従事する悪しき女性達の道徳的退廃とみなす一般的な見方があった。これに対して，被抑圧者，犠牲者としての農村女性の搾取を問題とし，売春をタイ社会の構造的問題，特に開発政策の歪みの結果とみなして，売春女性が，片寄った経済発展と農村における伝統と因習による社会的圧力の犠牲者として，家族の金銭的支えとなっていることが強調されるようになる。こうした議論によって(4)，売春は従事者である女性達の個人的な問題ではなく，社会的な広がりを持つ問題としてとらえられるようになった。しかし，その反面，売春の複雑な諸側面を度外視して農村部の因習を攻撃し，かつ結局，売春女性の性の搾取に議論を集中させてしまうことにもなった。また，農村女性達が売春によって家計を支えているという点を強調することは，売春の顧客に自己正当化の根拠を与えることでもあった。

1990年代のタイにおけるジェンダー・セクシュアリティ研究の転換を触発したのは，上述のレノルズの指摘とともに，それに先立つ1984年以降の

HIV／AIDSの脅威であった。1984年にタイにおける最初の感染例がアメリカから帰国した男性同性愛者であったため，当初は男性同性愛者が最大の「リスクグループ」として標的とされた。その後，麻薬注射用の針の使用者，売春女性へと，「リスクグループ」が移っていった。1980年代後半にはHIV感染の最大の「リスクグループ」が売春女性とされ，彼女達は健康カードの携帯を義務づけられる。しかしこれは，売春女性のみを感染の根元ととらえ，彼女達さえ抑えておけば感染は防げるという考えに基づいており，同様に感染している可能性のある顧客男性達に対して女性達を無防備にした。

しかし，1990年代に入り，売春の顧客を通じた家庭等への感染が明らかになるに従い，顧客男性とそのパートナー（妻，恋人）である女性達をめぐる性行動とHIV感染の広がりとの関連を見る視点が生じた。男性の性行動や，婚姻関係の中での性行動に注目したのがリトルトンである［Lyttleton 2000］。ここでリトルトンは，HIV／AIDSをめぐる国家レベルのメディアキャンペーンにおける論調の変遷を追い，タイにおけるHIV／AIDS言説の攻防について検証する。そして東北タイ農村における調査をもとに，国家主導のメディアキャンペーンによりローカルな性行動にどのような変化があったのか，HIV感染の増加と政府主導のキャンペーンなどがもたらしたローカルなセクシュアリティの意味づけ，表象，実践の変化を検証している。それによると，メディアを受け止める東北タイ農村の人々は，彼らなりのHIV／AIDS像をつくりあげており，HIV／AIDSは，夫婦間の性行動にも，また売春以外の婚外の異性関係にも変化をもたらした。リトルトンの研究は，HIV／AIDSの脅威のもとで実践的な目的を持った量的な調査，サンプリングによる性行動の研究などが主流だった中で，質的研究の重要性を示すと同時に，視点の転換をもたらした研究であった。タイの売春が論じられるとき，婚姻と商業的な性は全く別物とされがちであった。そのため，売春と婚姻における性関係や，売春以外の婚外の性関係との関連性を論じる視点が取られることがなかったのである。しかし近年の，リトルトンを含め，タイにおけるジェンダー・セクシュアリティ研究では，HIV感染と婚姻内外の性行動，家庭内暴力や性暴力，売春，そしてセクシュアリティそのものの議論が主要なテーマとなってきている。

1990年代を代表する論集としては，ジャクソンとクックの編著がある［Jackson & Cook eds. 1999］。この中で扱われるのは，HIV／AIDS時代のセクシュアリティやリプロダクションに関わるもの，階級の差異とジェンダーの関係を論じるもの，19世紀後半から20世紀初頭の近代国家とナショナリズム勃興期をジェンダーの視点から見直すもの，ホモセクシュアルやトランスセクシュアルに関わるものなどである。

中でもジャクソンらの研究は，タイにおけるジェンダー・セクシュアリティのカテゴリーの多様化について新しい議論の発端となった。男性的な男性と女性的な女性と，「第三の性」としてのカトゥーイ（現在では男性のトランスジェンダー，いわゆる女性的な男性のみに使われる）を，従来のタイのカテゴリーとすれば，これに加えて，1960年代から複雑なカテゴリー分化が進行していると指摘された。男性的女性（トム）とそのパートナーである女性的な女性（ディー），バイセクシュアルな男性（スアバイ），そしてゲイの男性の中でも受動役割，能動役割，両役割，などである。ジェンダー・セクシュアリティの再カテゴリー化は，従来の男・女・カトゥーイに，西洋的なホモセクシュアリティの概念体系が加わったものだとするモリスの議論に，ジャクソンは，むしろ既存の性の範疇が複雑化したものだと論じている。そして，ホモセクシュアリティやトランスジェンダーに寛容とされるタイにおける性的マイノリティの経験は，西洋における差別とは異なるとしても，文化的制裁が決して不在ではないことを指摘している。モリスとジャクソンは，性のカテゴリーが明確に排他的な二元的カテゴリーではなく，境界が曖昧で連続的・流動的なものだという見方においては，一致している［Morris 1994; Jackson 1999］。ジャクソンはまた，HIV／AIDSの脅威にともなって生じたタイにおけるゲイ・アイデンティティの再編を分析している［Jackson 1995］。さらに，「性的に自由なタイ」では，同性愛が容認される，という一般的なイメージは誤りであり，たしかに私的な実践において規範は緩やかであるが，公的言説の上ではセクシュアリティの検閲は実践よりもはるかに厳しいと述べている。HIV／AIDS対策をめぐる道徳化した議論を見れば，この見方はまさに当を得ている。こうした研究を契機に近年，セクシュアル・アイデンティティやセクシュアリティの研究が盛んである［Morris 1994; Jackson 1995; Jack-

son & Sullivan eds. 1999; Sinnott 2004; Thaweesit 2004]。

政府の本格的なHIV／AIDS対策が少しずつ効果を見せ始めるのは1990年代後半であり，21世紀に入ると，タイのHIV／AIDS対策は成功譚として語られるようになる。そこに秘められた権力によるセクシュアリティと倫理の統制を鋭く追及したのがフォーダムである［Fordham 2005］。彼は，HIV／AIDS予防の名の下に特定階層に感染の根元を見出す過度に道徳的な言説が生み出されたことを指摘している。そして，上述の「リスクグループ」自体が，HIV感染とともに生み出されていったタイの公的言説であり，タイのジェンダー・セクシュアリティをめぐる権力関係のあり方を映し出していると批判的に分析している。

これまで見てきたように，HIV感染の広がりは，タイにおけるジェンダー・セクシュアリティ研究に新しい展開をもたらした。タイの単婚家族の幻想が崩れ，性的な二重規範，男性による買春，婚姻とセクシュアリティなどについて再考を迫られ，研究の視点は売春女性のみに絞られたものから，次第に婚姻内外の非商業的な性，男性や同性愛者の性行動に広がった。そして，量的検証に片寄っていたセクシュアリティ研究においてようやく質的研究が始まった。

売春女性を伝統社会の抑圧の犠牲者とする議論に対して，タイの研究者によっても詳細な質的研究が行われた。北タイのパヤオ県で村落調査を行い，国家の開発のかげで農村社会の生産関係などが根本的に変容し，女性の役割が変化していく過程で若い娘達が売春に出て行くことを分析した人類学者ヨットの業績［Yos 1992］や，同県で村や家族と，女性達の間でどのような葛藤や変遷があるのか，丹念な聞き取り調査から書き起こしたニワットの労作［Niwat 1998］がある。

女性の健康や公衆衛生への関心についても，HIV／AIDS危機以後研究を取り巻く状況が大きく変化しているが，リプロダクティヴ・ヘルスへの関心などは持続している。より詳細な民族誌としては，ウィタカーが東北タイの農村調査から，農村経済の変化の中で女性の生産活動と再生産活動がどのように変化しているかに関心を持ち，身体理解と治療実践，知識の体系の変化，出産と女性の身体，性感染症，家族計画の普及，堕胎など女性のリプロダク

ティヴ・ヘルスをジェンダー・セクシュアリティの文脈で検証した［Whittaker 2000］。また道信は，北部タイの工場労働女性におけるHIV／AIDSキャンペーンと若い女性達のセクシュアリティについて現地調査に基づく分析を行っている［Michinobu 2004］。

一方，グローバルなフェミニズムの論点が，構造的抑圧や搾取から，女性の主体やエージェンシーへと移行するとともに，売春女性の主体や自立を論じるフェミニストや，NGO活動が活発化したのも1990年代である。経済活動としての売春を容認し，法的に認めることでこそ売春女性の自衛が可能となるという主張も出てきた。また，女性達の視点から売春を理解する試みもある［Walker & Ehrlich eds. 1992; Odzer 1994］。オザーはバンコクのバーで自ら参与観察とインタビューを行い，観光客をはじめとする外国人相手のバーが立ち並ぶパッポンの売春女性は，売春に関わらないタイの下層の女性達に比し，世界中の人々と出会い，自立の機会にめぐまれて，より世慣れているとして，彼女達の生を肯定的にとらえて論議を呼んだ。この他，近年，ゴーゴーバーにおける日本人など外国人も含めた女性達と客との関係形成と取引を論じた研究［市野沢 2003］や，売春に特化する議論ではないが，タイの消費経済の現場ともいえるモールやデパート，ゴーゴーバーなどを舞台に，商業主義と旧来の社会システムの交差するところで，社会関係やジェンダー・セクシュアリティがどのように再規定されているかを，文化論的に論じる著作も出てきており［Wilson 2004］，タイにおける性の市場と社会経済をめぐる議論は，多方向に広がりを見せ始めている。また，P. ヴァン・エステリクは，タイのジェンダー研究を，仏教，売春，表象と文化政策，美人コンテストなどのトピックから，総論的に概観してみせた［Van Esterik, P. 2000］。

5　外と内のセクシュアリティ言説——周縁に向かう他者化

上述の編著の序論で，クックとジャクソンは，「ジェンダー化され，セクシュアライズされたタイ人をめぐる言説は，タイ人自身によるものであれ，西洋人の観察によるものであれ，オリエント化する西洋の性的なまなざしに

影響されたより広義の政治，経済，知的プロセスの側面である」[Cook & Jackson 1999: 1] と述べている。タイのイメージの中には「性的に自由なタイ」という非タイ人にとって都合の良い幻想があり，その言説はさらなる幻想を助長する装置となってきた。このようなセクシュアライズされた「他者」像が，17 世紀からの西洋によるオリエントのエロティシズム化の幻想に根を持ち，国際的な観光化の中で，同じ構図が強化されてきたことを，文学やメディアの分析から議論する著作もある [Manderson 1997; Bishop & Robinson 1998]。ビショップとロビンソンは，白人男性顧客の視点から，売春現場に限らず，金銭を介した男女関係の経済と欲望，ロマンと関係性を，グローバルな経済と人種的ポリティクスの産物として論じ，それは，顧客のセクシュアリティとも密接に関連していると議論した(5)。

タイと先進国のセクシュアリティのイメージは互いの欲望が映し出された鏡像をなすのであり，先進国のセクシュアリティをめぐる志向がそのままタイを見る目に映し出されているとする議論もある [Hamilton 1997]。植民地経験を持つ島嶼部東南アジアで論じられたように [Stoler 1995]，西洋世界のセクシュアリティのイメージが，タイのセクシュアリティの歴史にどのように影響しているか，論じる必要があるだろう。

1991 年 6 月のニューヨークタイムズ紙第 1 面にチェンマイのバーの女性の写真が「待ち受ける伝染病」というセンセーショナルなキャプションとともに掲載された。1993 年には，タイム誌の表紙にバーの女性の写真が，「タイには 200 万の売春女性がいる」というキャプションとともに掲載されたが，さらに大きな論議を呼んだのは 1994 年にロングマンの辞書の「バンコク」の項目に「売春婦の多い町」という説明が付されたこと（この辞書はタイでは発禁となった）であった。そして同年 BBC 放送では，タイにおける HIV／AIDS の危険を強調する番組が放送されるなど，欧米のメディアによる打撃が続けざまにあった。タイ政府は一方で外貨獲得のために美しいタイ女性のイメージを売りながら，自国の対外イメージと観光への打撃の両方を懸念して，しばしばこうした国外メディアにおけるタイ売春の表象に抗議し，返す刀で，国内の女性団体による売春反対運動をそうした対外イメージを強化するものとして抑えんとした。

ブンチュエイ・スィーサワット著『チェンライの三十民族』(1950) に掲載されたアカ男女の性風俗の挿絵。この著者は当時稀少だったタイ北部から雲南の少数民族について多くの紹介書を記している。

20世紀初頭から近代国家への歩みの中でタイのエリートは，西洋列強に対して辛うじて独立を保ちながら，自ら文明国たる証を立てる必要性を感じていた。特に1920年代には，単婚と一夫多妻婚の間で議論が喧しく，そうした文脈の中で良き女性，悪しき女性の区別もまた論じられてきた［Loos 2006］。つまり，タイ国内におけるセクシュアリティをめぐる議論は常に西洋のまなざしを強く意識する中で構築され，それは，西洋のタイへのまなざしと相互に強化しあってきた。一方，外から向けられた他者化のまなざしは，タイ国内にあっては，タイ社会の周縁の少数者に向けられるものとして繰り返される。西洋近代の自己のセクシュアリティが他者に向けるまなざしによって醸成されたものだとすれば，タイ人自身のセクシュアリティもまた，そうした外からばかりでなく，自社会の周縁に向ける自らのまなざしによっても形成される。このように他者化するまなざしは，幾重にも繰り返される。

一般タイ人の間で，山地民の女性は，エキゾチックなセクシュアリティを表象するものとして描かれてきた。この傾向は，1980年代の山地民観光と，山地出身者の売春が増加すると，さらに顕著になる。豊田は，アカの女性が山地民観光の文脈で，「性的に自由な山地民社会」の表象として描かれることを指摘している［豊田 1996］。1980年代に，タイで売春に関わる女性達の多くがより実入りの良い国外へ出稼ぎするようになったが，その穴を埋めたのが，貧困化した山地出身や国境を越えた不法労働の女性達であった。した

がって，山地民もまたHIV感染の「リスクグループ」とされ，1990年代後半には多くの予防プロジェクトが山地に入ったのである。いまだ感染例が1件もなかった筆者の山地調査村で，すでに小さな子供までが「エイズは恐ろしい」と唱えるほどにキャンペーンは浸透していた。

筆者自身が研究対象としてきたカレンと呼ばれる人々は，同じ山地にありながらアカとしばしば対照的に語られてきた。「性的に奔放なアカ」の逆像，純潔の象徴としてのカレンであり，低地社会の描くアカとは逆の幻想である。カレン社会における性規範の厳しさは，19世紀にビルマを訪れた宣教師や植民地官吏が言及してきた。東インド会社社員による記録にも「カレンは完璧な道徳性によって特筆すべき」人々として描かれた。西洋の目に映じた，道徳的で単婚家族を規範とする人々としてのビルマのカレン像は，今日のタイにおけるカレンの娘達の純潔の語りとも通じる。アカとカレンの対照的な像は，低地タイ，あるいは植民地支配者という権力の側が周縁の他者を自らの鏡像として，欲望と幻想の対象とするまなざしの産物といえるのではないだろうか。

実際には山地カレン社会において性規範の逸脱は少なくないし，ムラの生活で相互の性行動を揶揄する軽口やひやかしもしばしば聞かれる。ただ，性に関わる違反があった場合に，ムラ全体で対処する道具立てが整っているのである。婚前または婚外の性交渉があったことが判明すると，女性側のムラの儀礼的リーダーが「マゲタ，マク（よくする，冷たくする）」という儀礼を執り行う。違反によって「熱く」なった土地は，そのままでは病や不作を呼ぶので，動物（水牛またはブタ）の供犠による血でムラを冷ますのである。リーダーは犠牲の動物を殺して土地の守護霊に祈りながら血を地面に注いで「冷ます」。そしてムラ中が供宴にあずかる。婚前交渉の場合は，このあと二人は結婚する。拒否すればムラにはいられなくなるのである。この儀礼が女性側のムラで行われることは注目すべきである。男性も女性も儀礼に参加するが，ムラの秩序に関わるのは女性のセクシュアリティへの侵犯なのである。結婚式自体が，基本的に守護霊に二人が結婚して生殖行為を行うことのできる関係になったことを知らせる儀礼なのであり，これも女性側のムラで行う。女性のセクシュアリティとムラの社会的・自然的秩序が密接に関わっている

未婚のカレン女性の装い（1988年）

のである。

しかし，山地カレンの間で広範囲に共有されるこの秩序と規範は，カレン以外の人々には意味を持たない。カレン社会が，そして親達がカレンの娘達のセクシュアリティを低地タイの男達から守ろうとするのは，こうした理由による。低地から見れば，それはカレン女性を欲望の対象として強化する，ともいえるかもしれない。山地と低地の相互の移動はどの時代にもあったが，現在は教育や労働など多様な目的で人々の移動範囲が広がっている。ムラの男性は広域に移動し，経験を積むことで，社会的な認知を獲得する。例えば低地タイ人の女性と関係を持つことも，自慢すべき冒険譚，男の勲章になる。遍歴の果てに，彼らはむしろ望ましい男性としてムラに戻ってカレンの女性と結婚することができる。女性の場合はそういうわけにはいかない。上述の侵犯の解決方法を共有しないよそ者と性交渉を持った場合，相手男性に儀礼を行うことも結婚を強要することもできない。行きずりの低地男性と関係を持ち，山地カレンの規範に従って名目的に結婚し，結局放置された女性のケースは少なくない。その場合，女性は既婚でありながら夫のいない曖昧な立場になるため，再婚することもむずかしい。こうしたことから，女性がしかるべき同伴者なしでムラから外へ出ることは，自らの評判をあえて危険に曝すことになる。カレン女性と非カレン男性との結婚は不安定で，潜在的に女性にとって非常に危険なものと認識される。このように山地カレンの男女のセクシュアリティをめぐっては，全き二重規範がある。

近年，低地の村の男性が，「カレンの嫁探し」にムラにやってきて，結婚するという例が増加している［速水 2000］。北タイ山地のカレン女性の民族衣

装は，既婚と未婚で大きく異なる。既婚女性は赤いスカートに黒いシャツ，未婚女性は白いワンピースである。次第に若い女性の白いワンピース姿は，タイ風の巻スカートやジーンズに変わりつつあるものの，低地の男性にとっては，「白いワンピースのカレン女性」は一つの表象であり，欲望の対象である。ムラへやってきて「白いワンピース」を探す低地の男性にとって，それは純潔で，よく働き，要求も少なく，従順で望ましい女性の表象なのである。一方，カレン女性にとっては，それはたとえ「ミアノーイ（タイ語で妾）」になるのだとしても貧困からの脱出の手だてになるかもしれない。

タイ国家の周縁にあって，山地カレン社会におけるセクシュアリティに関わる規範は，低地社会から見ればカレン女性に関わる幻想の根拠となる。民族の差異とセクシュアリティの差異が切り結び，このこと自体が，山地社会と低地社会の権力関係とも重なるのである。このような周縁の他者化と性的な幻想は，まさに先進国とタイの女性達の関係の繰り返しだともいえるだろう。アカ，カレンを対照的な鏡像として他者化するまなざしの連鎖の中で，日本を含む先進国の男女のあり方は，タイのジェンダーとセクシュアリティを経て，山地の彼らとも決して無縁ではなく，同時代のまなざしの交錯の中で連なっているのである。

6　タイにおける「ジェンダー」と「セックス」再考

タイのジェンダー・セクシュアリティ研究は，常に売春を重要なテーマにすえながら，性のカテゴリー，トランスジェンダー，同性愛やジェンダー・アイデンティティの研究や，より広範囲なセクシュアリティ研究も，まだ緒についたばかりである。女性のみにフォーカスを当ててきた「売春文化タイ」の議論も，買春に通う男性の視点や，男性性，売春以外の性関係の諸局面の議論へと広がりを見せ始めている(6)。

そもそもジェンダーとセクシュアリティはタイではどういう意味合いを持つのか。タイ語の「ペート」という言葉は生物学的セックス，ジェンダーのみならず，一般的には種類を意味する言葉で，かつての用例をみると「民族」にも用いられた(7)。これまで述べてきた，タイのジェンダー・セクシ

ュアリティ，売春などをめぐる欧米のバイアスを崩すためにも，彼らのカテゴリーから出発して見直す必要があるだろう。

以上述べてきたことを踏まえ，タイのジェンダー・セクシュアリティ研究から何を学びとることができるだろうか。第一に，他社会のジェンダー・セクシュアリティを表象することにともなう，幾重にも繰り返されるまなざしの交錯である。他者を見るまなざしには自己が映し出されることを，売春に偏重しがちだったタイ研究は特に鋭く教えてくれる。第二に，ジェンダー・セクシュアリティの差異と，階級や民族という差異の交差するところを見ることで，それらについて新しい動態的な理解が可能となる。そして，第三に，タイにおける性カテゴリーの流動的で多義的な概念を，現地のカテゴリーにより忠実に理解することは，固定化したジェンダー概念を再考するのに有効でありうる。

現在のタイにおけるジェンダー・セクシュアリティ研究は，多元化している。労働現場における平等，国際労働移動や国際結婚，性的嫌がらせ，政治や政党における女性，といったフェミニズム的な女性学の視点から女性の地位向上を目指すもの(8)から，家族の中のセクシュアリティと暴力，セクシュアリティの多義性，周縁社会における性，中間層の学生による売春，性的マイノリティなどにも目を向け始めている(9)。これらのトピックは，上述のタイにおけるジェンダー・セクシュアリティ研究の可能性を押し広げる方向性を十分にはらんでいる。

しかし，その一方で，タイにおけるジェンダー研究においては，日常的な家族や労働の場面で，男女の相互関係や生活実践がどのように変化しているかといった，緻密な民族誌的叙述に基づく研究の蓄積は，過去から現在に至るまで決して多くなかった。1999年のチェンマイ大学社会科学科の社会学人類学研究ジャーナルの特集号，「女性，労働，および女性労働——多重の周縁性」に掲載されたチェンマイ大学を中心とする人類学者，社会学者による主に農村社会を対象とする論集は，こうした研究が今，むしろタイの中で充実し始めていることを示している［Chuusak ed. 1999］(10)。

注

（1） タイの歴史資料で売春への言及が見出されるのはアユタヤ朝期からであるが，それによると中国人居住区域に見られ，課税の対象であった。19世紀半ばには，バンコクにも売春宿が作られ，それは材木搬出や鉱山の労働者のいる地方都市へも拡大した。売春に携わる女性達は，奴隷や夫に売られた妻達や，中国を中心に諸外国から売られてきた女性達だった。売春への課税は，19世紀後半から20世紀前半にかけて，国家歳入の重要財源となっていた。1874年のラーマ5世王の発案に始まり1905年に法制化された奴隷制廃止は，それまでの売春奴隷を契約売春へと再定義することになる。解放された男性は，兵士や下級官吏への道が開かれ，そのためにもある程度の教育機会が必要と想定され，国家形成への参与の道を得たが，女性は当時成立した「官的」空間から排除され教育も無用とされたのである［飯島・小泉 2000: 132］。

（2） これまで植民地体験の不在を背景に体制擁護的な歴史研究が大勢を占め，搾取，抑圧，紛争に関わる史的研究の不在が生じたと分析した。

（3） この主張は，同様にマレーシアのフェミニスト研究者カリムが，東南アジアにおける伝統的「バイラテラリズム」の主張をしていることと呼応している［Karim ed. 1995］。すなわち，伝統的に東南アジアでは父権的な傾向は弱く，社会組織においても文化・イデオロギーにおいても男女の相補的な関係が見られ，父権的な傾向は，外来の宗教などの思想的影響によるものだとする。

（4） 当時の議論やタイの売春を多角的に概観したものとして，Wathinee & Guest［1994］がある。

（5） グローバルな性秩序と売春現場，セックスツーリズムとグローバルな経済秩序を，バンコクの文化的・歴史的特異性と結びつける国際関係論の視点からの議論もある［Jeffrey 2002］。

（6） 早くは，カイズによる男性性をめぐる議論があるが［Keyes 1986］，これを買春と飲酒，男性同士のつきあいの文化や力の観念と結びつけて議論をしたのはフォーダムである［Fordham 2005］。

（7） 小泉［2006: 69］によると，その語源はパーリ語のvesoで，衣装や外見による分類を意味する言葉であったが，生来を強調する「チャート」が民族に当てられるようになって，「ペート」は専ら性別の意味を強めていった，とする。

（8） 1998年，タマサート大学「女性と青年研究プロジェクト」による，タイトルもそのまま『女性学』と題した論文集［Parichaat et al. eds. 1998］は，女性とメディア，人口学的変化と経済的変化の女性への影響，性的嫌がらせ，ドイツに移住する女性の国際結婚，地方政治や政党と女性，といったテーマ

の論文を集めている。

(9) 2003年，ピンゲーオの編著による『アイデンティティ，民族，そして周縁性』は，少数民族のみならず，HIV感染者，性的マイノリティとしての女性同性愛者，そして，中間層の学生による売春というテーマを扱った若手人類学者による論文を集めている。いずれも現地調査をもとにした分析である［Pinkaew ed. 2003］。

(10) 人類学者シャラーチャイによるタイの家族に関する再考を促す論文が含まれている。その他，従来の農村研究を細かく検討した上で，社会経済的な変動は，上流中流の女性達にはプラスの影響を持つとしても農村女性に関しては周縁化する方向に働くとする論文，東北タイにおける財産をめぐるジェンダー関係の変遷を村落調査に基づいて考察する論文，女性性産業従事者を含む日本への移動労働者の生活に関するもの，村落における女性の織物産業の振興についての事例研究などが含まれ，多くは，現地調査に基づきながら従来の理論的な枠組みを再考する意欲的な論文集である。

参考文献

Amara Pongsapich [1997] "Feminism Theories and Praxis: Women's Social Movement in Thailand", in Virada Somswasdi & S. Theobald (eds.), *Women, Gender Relations and Development in Thai Society* (two volumes), Women's Studies Center, Faculty of Social Sciences, Chiang Mai: Chiang Mai University.

Barmé, Scot [2002] *Woman, Man, Bangkok: Love, Sex, and Popular Culture in Thailand*, Lanham: Rowman and Littlefield.

Bishop, Ryan & Lillian S. Robinson [1998] *Night Market: Sexual Cultures and the Thai Economic Miracle*, New York & London: Routledge.

Chuusak Withayaaphak (ed.) [1999] *Phu Ying, Raeng Ngaan, lae Raeng Ngaan Phuu Ying: The Multiple Marginality*, Special Issue of the Research Journal of the Department of Sociology and Anthropology, Vol. 11, No.2, Chiang Mai: Chiang Mai University.

Cohen, Paul & Gehan Wijeyewardene [1984] "Spirit Cults and the Position of Women in Northern Thailand", *Mankind* (Special Issue) 14(3): 249-360.

Cook, Nerida M. [1998] "'Dutiful Daughters', Estranged Sisters: Women in Thailand", in K. Sen & M. Stivens (eds.), *Gender and Power in Affluent Asia*, London: Routledge.

Cook, Nerida M. & Peter A. Jackson [1999] "Introduction/Desiring Constructs: Transforming Sex/Gender Orders in Twentieth-Century

Thailand", in P. A. Jackson & N. M. Cook (eds.), *Genders and Sexualities in Modern Thailand*, Chiang Mai: Silkworm Books.

Darunee Tantiwiramanond & Shashi Ranjan Pandey [1987] "The Status and Role of Thai Women in the Pre-Modern Period: A Historical and Cultural Perspective", *Sojourn* 2: 124-149.

——— [1991] *By Women, For Women: A Study of Women's Organizations in Thailand*, Social Issues in Southeast Asia: Research Notes and Discussions Paper No.72, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Davis, Richard [1973] "Muang Matrifocality", *Journal of the Siam Society* 61: 53-62.

Eberhardt, Nancy (ed.) [1988] *Gender, Power, and the Construction of the Moral Order: Studies from the Thai Periphery*, Monograph 4, Madison: Center for Southeast Asian Studies, University of Wisconsin.

江藤双恵 [1996a]「タイにおける女性学——その研究と実践」原ひろ子・前田瑞枝・大沢真理編『アジア・太平洋地域の女性政策と女性学』新曜社。

——— [1996b]「ジェンダーと家計貢献——現代タイ農村の実態から」関啓子・木本喜美子編『ジェンダーから世界を読む』明石書店。

Fordham, Graham [2005] *A New Look at Thai Aids: Perspectives from the Margin*, New York & Oxford: Berghahn.

Hamilton, Annette [1997] "Primal Dream: Masculinism, Sin and Salvation in Thailand's Sex Trade", in L. Manderson & M. Jolly (eds.), *Sites of Desire, Economies of Pleasure: Sexualities in Asia and the Pacific*, Chicago: University of Chicago Press.

Hanks, Jane Richardson [1963] *Maternity and Its Rituals in Bang Chan*, Ithaca: Southeast Asia Program, Cornell University.

Hanks, Lucien M. & Jane Richardson Hanks [1963] "Thailand: Equality Between the Sexes", in B. E. Ward (ed.), *Women in the New Asia: The Changing Social Roles of Men and Women in South and South-East Asia*, Paris: UNESCO.

速水洋子 [1995]「カレン族における秩序と豊饒，男と女」清水昭俊編『洗練と粗野——社会を律する価値』東京大学出版会。

——— [1998]「『民族』とジェンダーの民族誌——北タイ・カレンにおける女性の選択」『東南アジア研究』35(4): 852-873.

——— [2000]「差異の交差するところ——北タイ山地における民族間結婚」『地域研究論集』3(2): 21-35.

平井京之介［1995］「家を化粧する——北部タイの女性工場労働者と消費」『民族学研究』59(4): 366-387.
——— ［2001］「北タイ女性工場労働者とタン・サマイ言説——『近代性』への民族誌的アプローチ」『国立民族学博物館研究報告』26(2): 237-257.
Hutheesing, Otome Klein [1990] *Emerging Sexual Inequality among the Lisu of Northern Thailand: The Waning of Dog and Elephant Repute*, Leiden: E. J. Brill.
——— [1995] "Gender at the Margins of Southeast Asia", in W. J. Karim (ed.), *'Male' and 'Female' in Developing Southeast Asia*, Oxford: Berg.
市野沢潤平［2003］『ゴーゴーバーの経営人類学——バンコク中心部におけるセックスツーリズムに関する微視的研究』めこん。
飯島明子・小泉順子［2000］「『人を"タート"にしたくない』——タイ史のジェンダー化に向ける一試論」『東南アジア——歴史と文化』29: 123-152.
Jackson, Peter A. [1995] *Dear Uncle Go: Male Homosexuality in Thailand*, Bangkok: Bua Luang Books.
——— [1999] "Tolerant But Unaccepting: The Myth of a Thai 'Gay Paradise'", in P. A. Jackson & N. M. Cook (eds.), *Genders and Sexualities in Modern Thailand*, Chiang Mai: Silkworm Books.
Jackson, Peter A. & Nerida M. Cook (eds.) [1999] *Genders and Sexualities in Modern Thailand*, Chiang Mai: Silkworm Books.
Jackson, Peter A. & Gerard Sullivan (eds.) [1999] *Lady Boys, Tom Boys, Rent Boys: Male and Female Homosexualities in Contemporary Thailand*, Chiang Mai: Silkworm Books.
Jeffrey, Leslie Ann [2002] *Sex and Borders: Gender, National Identity and Prostitution Policy in Thailand*, Honolulu: University of Hawaii Press.
Karim, Wazir Jahan (ed.) [1995] *'Male' and 'Female' in Developing Southeast Asia*, Oxford: Berg.
Keyes, Charles F. [1984] "Mother or Mistress but Never a Monk: Buddhist Notions of Female Gender in Rural Thailand", *American Ethnologist* 11 (2): 223-241.
——— [1986] "Ambiguous Gender: Male Initiation in a Northern Thai Buddhist Society", in C. W. Bynum, S. Harrell & P. Richman (eds.), *Gender and Religion: On the Complexity of Symbols*, Boston: Beacon Press.
Kirsch, A. Thomas [1975] "Economy, Polity and Religion", in G. W. Skinner & A. T. Kirsch (eds.), *Change and Persistence in Thai Society*, Ithaca:

Cornell University Press.
小泉順子 [2006]『歴史叙述とナショナリズム——タイ近代史批判序説』東京大学出版会。
Loos, Tamara [2006] *Subject Siam: Family, Law, and Colonial Modernity in Thailand*, Ithaca: Cornell University Press.
Lyttleton, Chris [2000] *Endangered Relations: Negotiating Sex and AIDS in Thailand*, Bangkok: White Lotus.
Manderson, Lenore [1997] "Parables of Imperialism and Fantasies of the Exotic: Western Representations of Thailand—Place and Sex", in L. Manderson & M. Jolly (eds.), *Sites of Desire, Economies of Pleasure: Sexualities in Asia and the Pacific*, Chicago: University of Chicago Press.
Michinobu, Ryoko [2004] "Configuring an Ideal Self through Maintaining a Family Network: Northern Thai Factory Women in an Industrializing Society",『東南アジア研究』42(1): 26-45.
Mills, Mary Beth [1999] *Thai Women in the Global Labor Force: Consuming Desires, Contested Selves*, New Brunswick: Rutgers University Press.
水野浩一 [1981]『タイ農村の社会組織』創文社。
Morris, Rosalind [1994] "Three Sexes and Four Sexualities: Redressing the Discourses on Gender and Sexuality in Contemporary Thailand", *Positions* 2 (1): 15-43.
Muecke, Marjorie A. [1984] "Make Money not Babies: Changing Status Markers of Northern Thai Women", *Asian Survey* 24: 459-470.
Niwat Suwanphatthana [1998] *Chumchon Khaa Praawenii*, Chiang Mai: Women's Studies Center, Chiang Mai University.
Odzer, Cleo [1994] *Patpong Sisters: An American Woman's View of the Bangkok Sex World*, New York: Blue Moon Books.
Parichaat Walaisathian, Phawanaa Phattanasri & Sinit Sitthirak (eds.) [1998] *Satrii Suksaa*, Bangkok: Thammasat University, Women and Youths Studies Project.
Pasuk Phongpaichit [1982] *From Peasant Girls to Bangkok Masseuses*, Geneva: International Labor Office. (田中紀子訳『マッサージ・ガール——タイの経済開発と社会変化』同文舘出版, 1990)
Pinkaew Luangaramsri (ed.) [2003] *Attalak, Chaatiphan, lae, Khwaampen Chaaikhaup*, Research Monograph 34, Sirinthorn Anthropology Center.
Potter, Sulamith Heins [1977] *Family Life in a Northern Thai Village: A Study in the Structural Significance of Women*, Berkeley: University of

California Press.
Reynolds, Craig [1994] "Predicaments of Modern Thai History", *South East Asia Research* 2(1): 64-90.
重冨スパポン [1997]「タイの女性労働者史 1960—1980 年」(重冨真一訳) 林玲子・柳田節子監修, アジア女性史国際シンポジウム実行委員会編『アジア女性史——比較史の試み』明石書店。
Sinnott, Megan J. [2004] *Toms and Dees: Transgender Identity and Female Same-Sex Relationships in Thailand*, Honolulu: University of Hawaii Press.
Stoler, Ann Laura [1995] *Race and the Education of Desire: Foucalt's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*, Durham: Duke University Press.
Sukanya Hantrakul [1988] "Prostitution in Thailand", in G. Chandler, N. Sullivan & J. Branson (eds.), *Development and Displacement: Women in Southeast Asia*, Monash Papers on Southeast Asia No. 18, Melbourne: Centre of Southeast Asian Studies, Monash University.
Tanabe, Shigeharu [1991] "Spirits, Power and the Discourse of Female Gender: The *Phi Meng* Cult of Northern Thailand", in Manas Chitakasem & A. Turton (eds.), *Thai Constructions of Knowledge*, London: SOAS.
Thaweesit, Suchada [2004] "The Fluidity of Thai Women's Gendered and Sexual Subjectivities", *Culture, Health & Sexuality* 6(3): 205-219.
豊田三佳 [1996]「観光と性——北タイ山地の女性イメージ」山下晋司編『観光人類学』新曜社。
Truong, Thanh-Dam [1990] *Sex, Money, and Morality: Prostitution and Tourism in Southeast Asia*, London: Zed Books.
Van Esterik, John [1996(1982)] "Women Meditation Teachers in Thailand", in P. van Esterik (ed.), *Women of Southeast Asia*, Monograph Series on Southeast Asia Occasional Paper No. 17, De Kalb: Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies.
Van Esterik, Penny [1996(1982)] "Laywomen in Theravada Buddhism", in P. van Esterik (ed.), *Women of Southeast Asia*, Monograph Series on Southeast Asia Occasional Paper No. 17, De Kalb: Northern Illinois University, Center for Southeast Asian Studies.
——— (ed.) [1996(1982)] *Women of Southeast Asia*, Monograph Series on Southeast Asia Occasional Paper No. 17, De Kalb: Northern Illinois

University, Center for Southeast Asia Studies.
——— [2000] *Materializing Thailand*, Oxford & New York: Berg.
Virada Somswasdi & Sally Theobald (eds.) [1997] *Women, Gender Relations and Development in Thai Society* (two volumes), Women's Studies Center, Faculty of Social Sciences, Chiang Mai: Chiang Mai University.
Walker, Dave & Richard S. Ehrlich (eds.) [1992] *Hello My Big Big Honey !: Love Letters to Bangkok Bar Girls and Their Revealing Interviews*, Bangkok: Dragon Dance Publications.
Wathinee Boonchalaksi & Philip Guest [1994] *Prostitution in Thailand*, Institute for Population and Social Research, Nakhon Pathom: Mahidol University.
Whittaker, Andrea [2000] *Intimate Knowledge: Women and Their Health in North-East Thailand*, Women in Asia Publication Series, St. Leonards: Allen & Unwin.
Wilson, Ara [2004] *The Intimate Economies of Bangkok: Tomboys, Tycoons, and Avon Ladies in the Global City*, Barkeley: University of California Press.
Yos Santasombat [1992] *Mae Ying Khaai Tua: Chumchon lae Kaan Khaa Praweni Nai Sangkhom Thai*, Bangkok: Community and Local Development Press.